

## 論文の概要および審査結果の要旨

|         |   |
|---------|---|
| 氏名（本籍）  | 星優也（京都府）  |
| 学位の種類   | 博士（文学）  |
| 学位記番号   | 甲第103号  |
| 学位授与の日付 | 平成31年3月18日  |
| 学位授与の要件 | 佛教大学学位規程第5条   |
| 学位論文題目  | 『神祇講式』の生成と変貌<br>ー〈中世神道と神楽〉研究のためにー                     |
| 論文審査委員  | 主査 斎藤英喜（佛教大学教授）<br>副査 八木透（佛教大学教授）<br>副査 阿部泰郎（名古屋大学教授） |

### 〔1〕論文の概要

星優也氏の博士請求論文『『神祇講式』の生成と変貌ー〈中世神道と神楽〉研究のために』（以下、本論文）は、鎌倉時代初期の貞慶(1155～1213)作とされる『神祇講式』の解説とともに、それが後の時代にいかに受容、変容したかを追及したものである。

『神祇講式』とは、神々を供養、賛嘆する講式のことで、平安時代後期から、春日、八幡、熱田など特定の神を対象とするものが多数作成された「神祇系講式」の系譜に位置付けられるものである。しかし本論文が取り上げる『神祇講式』は、春日神、八幡神、熱田神といった特定の神社の神々ではなく、「神祇」という、きわめて抽象的な神格を対象とすることに、その一番の特徴がある。

本論文は、第二章において、その特徴を『神祇講式』の内容の読み取りから明らかにしていく。そこで浮かび上がってきたのは、「神祇」という対象を越えて、「神冥」なる神格が重視されていたことだった。そこで中世の神仏信仰史のなかで「神冥」の意義を確かめつつ、『神祇講式』の「神冥」が衆生を救済する神であるとともに、生と死をつかさどる「冥道の神々」を取り込み、貴賤霊・六道諸霊にいたるまで廻向することを可能としたことを明らかにした。

第三章では『神祇講式』の諸本に書かれた「随所」という言説に注目する。そこから本講式が、多種多様な儀礼の場で読まれることで「随所」に礼賛する神々を変え、熱田や岩木山へと展開し、吉田神道を通して春日神の祭文となり、さらには『神祇講秘式』や『神祇通用祭文』という独自の祭文を生み出すことを論じた。続く第四章では、奥三河の大神楽・花祭、対馬の神楽、そして薩摩の藺牟田神舞などの「神楽」の場で読まれることを捉えて、その前景として文明期以降に大神神社周辺から勃興した両部神道系の流派である「三輪流神道」の儀礼、作法のなかで『神祇講式』とともに「神楽大事」なる作法があることを明らかにした。ここから『神祇講式』が三輪流神道から神楽、神舞へと展開すること

を論じて、従来の思想史研究や民俗芸能研究では見えてこなかった、「中世神道と神楽」というあらたな問題系を掘削していくことに至るのである。

こうした本論文の論述を支えている方法論を導くために、第一章の「研究史の整理と本論の課題」が置かれている。そこで中世の神仏信仰史の研究を、黒田俊雄から桜井好朗、さらに「中世日本紀」の伊藤正義、「中世神話」の阿部泰郎などにいたる展開とともに、神楽・祭文の研究史として、五来重、岩田勝から山本ひろ子、斎藤英喜の研究の系譜を踏まえ、それらが交差する地点、すなわち「儀礼」の場から生成する信仰世界を読み解く方法を設定したのである。

本論文は、そうした方法から『神祇講式』を読み解き、さらにそれが多種多様な儀礼の場に変貌、展開していく様相を明らかにしたものといえよう。

以下、本論文の目次を掲げる。

\*\*\*\*\*

はじめに

## 第一章 研究史の整理と本論の課題

### 第一節「中世神道」研究の現在と課題

(1) 黒田俊雄から桜井好朗へ

(2) 伊藤正義の「中世日本紀」から山本ひろ子の「中世神話」へ

### 第二節 神楽・祭文の研究史

(1) 初期神楽研究から五来重の指摘へ

(2) 岩田勝から山本ひろ子へ

(3) 斎藤英喜の「いざなぎ流」研究

### 第三節『神祇講式』とは何か—基本情報の整理—

(1) 『神祇講式』について

(2) 『神祇講式』の研究史

(3) 「神祇」・「当社権現」・「廻向発願」段

## 第二章 神冥論 —『神祇講式』「廻向発願」段をめぐって—

### 第一節『神祇講式』における「神冥」

### 第二節 平安後期から鎌倉前期の「神冥」用例

### 第三節 「神祇」と「神冥」

### 第四節 諸霊に廻向する「神冥」

## 第三章 生成する『神祇講式』 —随所・慈悲万行・祭文—

### 第一節『神祇講式』総礼伽陀の形成

### 第二節『神祇講式』における「随所」

(1) 『神祇講式』の「随所」言説

(2) 変貌する「慈悲万行」の神

### 第三節 新しい講式・祭文の生成

(1) 『神祇講秘式』について

(2) 談山神社の地鎮遷宮作法

(3) 『神祇講秘式』から『神祇通用祭文』へ

#### 第四章 変貌する『神祇講式』 ―神道灌頂から神楽・神舞へ―

##### 第一節 三輪流神道の『神祇講式』

###### (1) 三輪流神道の次第から

###### (2) 『神楽大事』と『神祇講式』

##### 第二節 奥三河における『神祇講式』

###### (1) 大神楽「大行事勧請」

###### (2) 花祭「天の祭り」

##### 第三節 藺牟田神舞における『神祇講式』

###### (1) 神代巻・神祇講式・大中臣の祓

###### (2) 手恵舞における「廻向」

###### (3) 神祇講式を招し祈らん

おわりに

\*\*\*\*\*

#### 〔2〕 審査結果の要旨

次に審査において示された、本論文の評価と問題点について述べる。まずこれまで修験道や中世神道の研究で扱われていたものの、徹底的な本文の読解、諸本の調査などが行われていなかった『神祇講式』を正面きって解説・研究したことの意義は大きい。とりわけ本講式が対象とした中世の神の特質として、「神冥」の相貌を照らし出したことで、これまでの中世神仏信仰史研究を進展させたことは間違いない。

またもう一点は、第三章、第四章で展開したように、『神祇講式』の「随所」の文言から、中世に広く行われた儀礼世界、とりわけ中世後期の列島社会の各地に展開していった「神楽」と結びつくことを、具体的な資料にそくして明らかにしたところだ。そのことと連結する形で、三輪流神道のテキストに頻出する「神楽大事」なるものへの注目、山本ひろ子による先行研究があるものの、本論文では、それをさらに一歩進めることになった。すなわち、「神楽大事」は、文明期以降に大神神社周辺から生れた両部神道系の「三輪流神道」の次第書にも「神祇講式」とともに読まれること、あるいは「神楽大事」において、中世的な岩戸神楽譚の主役となる「五人の神楽男」と「八人の八乙女」を観想するという次第もあったことなども見えてきた。

こうした星氏の研究の意義は、近年の「中世神楽」研究の進展とクロスするところである。すなわち 2016 年刊行の斎藤英喜・井上隆弘編による『神楽と祭文の中世』という論文集の成果、さらに 2017 年に名古屋大学で開催された「花祭×いざなぎ流」の《シンポジウム・中世神道と神楽》のテーマを正面から引き受けた成果であったのである。

それを可能としたのは、第一章に示されたように、近年の中世信仰史研究、中世神道研究、さらに神楽研究の研究動向と真正面に向き合い、それと格闘するなかで獲得しえた先鋭的な方法意識とともに、それをたんなる抽象的な議論としてではなく、三輪流神道書、吉田神道書などの文献調査をはじめ、奥三河、薩摩の藺牟田などの地域社会に伝わる資料をも読み込んで、資料にそくしながら展開・論述していった点にあるだろう。その研究姿

勢は、大いに評価されるものである。

一方、審査のなかで指摘された問題点としては、大きくふたつがある。ひとつは『神祇講式』の作者を貞慶とするのか、否かの記述が曖昧になっているところである。論述の箇所で「貞慶に仮託」と読める記述もあるが、その根拠は示されないままになっている。そのことを明らかにしていないことが、『神祇講式』の成立の時代性ととも、それが生れた時代動向との関わりなども不明確になっていることが指摘された。その点に関しては、今後、『神祇講式』全体に対する注釈的研究を行うことが要望された。

もうひとつは、『神祇講式』が特定の神格ではない「神祇」という抽象的神格を対象とするならば、なぜ「随所」という文言によって、多様な地域の個別的な神々の「講式」に変わりうるのか、その論理がはっきりしないという指摘があった。そのことは、『神祇講式』を受容した、たとえば奥三河や藺牟田などの地域社会における、儀礼、神楽の担い手たる宗教者のもつ知識、信仰の解明が弱いこと、さらにフィールド研究の立場からは、各地域の神楽を執行する「人間」の姿が見えてこない、という批判がなされた。それはテキストの生成、変貌が、結局「テキストの自己運動」のように扱われてしまうという、論の弱点と結びつくところである。神楽研究としては、地域の宗教者の歴史的な相貌が見えてこない点は、今後の大きな課題として残されたといえよう。

以上、大きく二つの問題点が指摘されたが、それはすなわち、本論文が辿り着いた成果があるゆえに見えてきたところである。とくに後者については、フィールド研究という、星氏の研究方法とも結びつくところで、まさに「今後の課題」となっているところであろう。

そしてそれ以上に強調すべきは、本論文が、博士課程の在籍三年間のあいだに執筆されたことだ。それは星氏の研究に対する情熱と大いなる努力の成果であることは間違いない。さらにいえば、星氏は、本論文のベースとなった既発表のもの以外にも、すでに『京都民俗』『日本宗教文化史研究』『新しい歴史学のために』などの学会誌に論文を多数、発表しているように、中世信仰史研究、あるいは神楽研究の先端を担う若手研究者として、今後の研究進展が期待される存在である。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。